

保育所の機能に関する研究（その4）

——保育学生の意識調査をもとに——

○伊達悦子

金崎美美子 石原栄子

高橋とも子

（作新学院女子短期大学）（宇都宮大学）（栃木県立衛生福祉大学校）（宇都宮市立さつき保育園）

はじめに

我々はこれまで保育所の機能に関する一連の研究を進めてきた。その中で保育者の研修制度の在り方及び内容と保育者としての意識との関連が深いことを指摘した（38・39回大会発表）。すなわち児童福祉施設としての保育所の機能や社会の変動にともなって多様化する保育ニーズ等に対して、その認識を深めていくための学習が保育者にとって不可欠のものであり、研修が単に保育技術の習得に終わってはならないという観点から、現行の研修の在り方についても検討してきた。

そこで今回、これから保育者になろうとしている保育学生の意識調査を行ない、すでに実施した保育者集団と比較することによって、保育者の現職教育の意義と重要性を指摘したいと考える。

1. 調査の手続き及び方法

調査対象者は栃木県内の保母養成校（公立保母養成校と私立短期大学の2校）の2年次に在籍している121名である。調査時期は、実際の保育者となる日を間近にした1987年1月である。調査用紙は比較研究のため、前回実施した保育者を対象とした調査の際に使用したものと同一のものである。

2. 調査の結果と考察

（1）保育者を志望した理由

積極的志望動機を持つものは全体の88.7%、消極的志望動機は10%という結果である。最も多いものは「子どもが好きだから」（42.7%）、次いで「他の仕事よりやりがいがある」（36.0%）となっている。保育者としての就職が厳しい中で進学してくる学生たちであるためか、積極的志望動機を挙げるものは保育者集団よりも多い。しかし、「福祉の担い手」、「経済的自立」といった動機は保育者集団では各4.5%あるのに対して、学生集団ではかなり低率となっている。福祉教育の実践や男女雇用機会均等法の実現など、新しい福祉観や女性の就労・社会参加が叫ばれる時代に育った世代にも関わらず、志望動機の画一化には意識の低さの一端が表れているといえよう。

（2）保育所は誰のためのものか

保育所は児童福祉施設ではあるが、実際には多面的

機能を有している。そのことについての意識を5段階評定によってみたものが表1である。「強くそう思う」という回答が多かったのは「子どものためのもの」（59.4%）、「母のためのもの」（42.1%）、「家庭のためのもの」（29.8%）の順である。これらの順位は保育者の場合と変わらないが、積極的に肯定したものの数はかなり少ない。そこで「わからない」の回答を0点として、左右に±1、±2点を配点してその平均値を見ると、全項目に渡って保育者集団より低値を示している。なかでも「父のためのもの」と「地域社会のためのもの」は、学生集団で著しく低い数値となっている。このことは育児に関する性役割分業意識にとらわれた結果、保育所観までも偏って認識していることを表しているといえよう。一般に若者層の保守帰帰傾向が指摘されているが、旧来の結婚観や育児観を将来、職業人となるべき保育学生が踏襲している現実を物語っている。

また、学生は地域社会のメンバーとしての生活感覚が希薄なために家庭生活と地域社会とを関連づける意識が乏しいのであろう。

表1 保育所は誰のためのものか 人(%)：N=121

	強く思う	少し思う	解らない	あまり 思わない	全く 思わない	無回答
父	1 (0.8)	40 (33.1)	8 (6.6)	55 (45.5)	17 (14.0)	0
母	51 (42.1)	55 (45.5)	3 (2.5)	8 (6.6)	4 (3.3)	0
子ども	72 (59.5)	36 (29.8)	4 (3.3)	7 (5.8)	2 (1.7)	0
保育者	9 (7.4)	30 (24.8)	19 (15.7)	47 (38.8)	16 (13.2)	0
家庭	36 (29.8)	61 (50.4)	8 (6.6)	11 (9.1)	5 (4.1)	0
地域社会	9 (7.4)	38 (31.4)	25 (20.7)	38 (31.4)	11 (9.1)	0
国家	1 (0.8)	15 (12.4)	33 (27.3)	26 (21.5)	44 (36.4)	2 (1.7)

(3) 子どもに対する保育所の役割

保育所が子どものものであると認識している学生は89.3%に達するが、それでは具体的にどのような役割を果たしているか問うたものである。「強く思う」は、「友達あそび」(68.6%)、「自主・自立の習慣・態度」(57.9%)、「生命と生活を守る」(39.7%)の順で、保育者の場合と同じであるが、数値的には学生集団が著しく低い。短期間の実習体験しか持たない学生の場合、保育所に関して概念的には理解していても、各論に相当する具体的な機能や目的など、保育所を子どもにとっての総合的な生活の場として認識するにはまだまだ学習を積む必要があることを示している。子どもの発達を保障するという職業的アイデンティティは保育者としての実践の中から形成されるものと考えられるからである。

(4) 両親に対する保育所の役割

他の調査項目に比して、「あまりそう思わない」や「わからない」と回答するものが多かった。「強く思う」は「育児負担の軽減」(27.3%)、「両親の社会的生活の拡大」(20.7%)、「家庭育児への指導的役割」(16.5%)などに見られる。保育者集団との顕著な違いは、「家庭経済の安定を図る」で、保育者の27.8%に対して学生は5.8%に過ぎない。一方、「両親の精神的安定」・「両親の社会的生活の拡大」・「母親の経済的自立と男女平等」は学生集団の方が高率に「強く思う」と回答している。これは、労働の現実感や生活実感が、保育者と学生では大きく異なっていることを示す結果と思われる。

(5) 保育者にとっての保育所の役割

学生にとって回答の困難な項目であった。「強く思う」は「専門的知識・技術の習得」(40.5%)、「人間としての成長」(33.9%)に見られるが、平均値と比較すると全体に保育者集団より著しく低い。前記項目の「両親にとっての保育所の役割」でも触れたが、労働観、社会観とともに保育者としての職業意識は、卒業後の学習課題といえよう。

(6) 保育所の今後の課題

児童福祉施設としての保育所が、今後どのような保育ニーズに対応して行くべきかについて問うた。「障害児保育」(58.7%)、「育児相談」(53.7%)、「乳児保育」(42.1%)は、保育所及び保育行政の現状から考えて当然のことと言える。また、保育実習でもなじみ深いものである。保育者集団では否定的回答が多かったのに、学生集団では肯定的回答

が多かったものとして、「園庭開放」(82.6%)、「延長保育」(68.6%)、「一時預り」(81.0%)、「病児保育」(47.6%)がある。「夜間保育」に至っては、保育者の場合11.3%が「思う」と答えたのに対して、学生では38.9%にも及んでいない。

これらの傾向については、観念的レベルの知識ではあるが、保育行政の今日的課題として授業の中で学習した結果と思われる。保育者集団で肯定的に受け止められていないのは、施設整備や人員配置など運用上の諸問題、更には保育者にも社会的にもコンセンサスが得られていないなど、多くの問題点を反映した結果とも考えられる。

表2 保育所の今後の課題 人(%) : N=121

	強く思う	少し思う	解らない	あまり思わない	全く思わない	無回答
延長保育	19 (15.7)	64 (52.9)	5 (4.1)	27 (22.3)	6 (5.0)	0
夜間保育	7 (5.8)	40 (33.1)	12 (9.9)	32 (26.4)	30 (24.8)	0
一時預り	44 (36.4)	54 (44.6)	10 (8.3)	12 (9.9)	1 (0.8)	0
園庭開放	51 (42.1)	49 (40.5)	11 (9.1)	8 (6.6)	2 (1.7)	0
障害児保育	71 (58.7)	40 (33.1)	6 (5.0)	2 (1.7)	2 (1.7)	0
乳児保育	51 (42.1)	43 (35.5)	13 (10.7)	12 (9.9)	2 (1.7)	0
病児保育	13 (10.7)	45 (37.2)	32 (26.4)	26 (21.5)	5 (4.1)	0
学童保育	23 (19.0)	44 (36.4)	27 (22.3)	23 (19.0)	4 (3.3)	0
育児相談	65 (53.7)	44 (36.4)	6 (5.0)	5 (4.1)	0	1 (0.8)

まとめ

調査結果の全体を見ると、保育学生が未来の保育者として憧れを持って学び、職業に対して楽観的な夢を持っている姿がうかがえる。しかし、社会の構成員として、労働観、社会観、職業的アイデンティティ、結婚観、育児観など生活人として、職業人として今後学ばなければならない多くのことが明らかにされた。殊に社会変動の激しさや女性の就労の増加とその多様化といった事態を考えると、それらは単に学生時代の学習課題にとどまらず、保育者としての現職教育へと引き継がなければならないものと考えられる。むしろ、現職教育の中にごそ家庭、保育所、地域を支える専門的福祉従事者としての成長があるのだと考える。